

# ニハ・には・庭

## 人と自然の関係—3つのかたち

The relationship between Humans and Nature  
Three Meanings and Forms indicated by a Word “Niwa”

岡田憲久

OKADA Norihisa

### はじめに

20世紀、そして21世紀、大量生産、大量消費の社会を発展させ維持するための都市の構築と拡大はとどまることを知らず、人間は、そのなかで翻弄され続けてきた。コンクリートで強固な川や海の堤防による治水が行われ、日常の気温の寒暖も空調によって常に快適な温度、湿度調整がなされ、医療の発達により長寿がかない、あたかも自然を制御しきれたように思われていた。しかし近年の急速な自然資源の枯渇と、温暖化や巨大台風、水害などの気候変動も人間活動により引き起こされている可能性が大きいとの認識に至り、その軌道修正への道が様々に模索されている。自然環境を背景とした人間の生活環境であるべきだと、「自然との共生」、「サステナブル」などの言葉が掲げられ諸策が模索されながらも、環境と経済活動はなかなか折り合いがつかない。そんな中2020年の春からのコロナ禍により世界の経済活動のみならず、日常の暮らしの在り方にまで強くブレーキがかかった。このコロナ禍も自然の驚異なのだろうか。世界の今までの在り方がストップしたのである。

近年の自然の、この局端で凶暴な不安定さは人間世界の日常を脅かし、太古の時代に畏怖すべきものとしてあった自然、人間によって制御されたかに思えた自然に再び向き合わされているように思える。今日のこうした状況に対し、惑星としての地球の状態が、地質年代的にも完新世の次の段階の「人新世」と呼ばれる、人間が地球を支配する時代に入っていると考える方が今話題を呼んでいる。また、人間がこれまでに作り出してきたコンクリートやプラスチックなどの総量が、過去100年間で自然由来の物より多くなったとの報告もなされている。

人間が作り出してきた文明社会の中で、巨大な人工物は都市である。本来は自然を背景として成立すべき都市が、周りの自然環境を食いつぶしながら巨大化しすぎたため、今日では再び都市の中に自然環境を機能として作り出さざるを得なくなっている。そのための急速な自然への接近の試みが随所に現れてきているが、自然との共生の方法は混乱をきたしているように思える。自然とは何か。人間とは何か。人間存在は、生命の一員である人間存在であることと、生命からあまりにもかけ離れてしまった人間存在であることの二面性を持

つ存在である。その境界をどのように生きるのかが今突き付けられているのである。しかし生命の一員であることからあまりにもかけ離れてしまった人間存在の位置からは、生命とは何かガリアリティとして見えなくなってしまう。

川勝平太がフランスの地理学者オギュスタン・ベルグを読み解こうとした、「ベルグ風土学とは何か」という書がある。その中で「近代西欧の知の範型」の源流は「我思う、ゆえに我あり」にあると、デカルトのテーゼを引いている。近代西欧の人間中心主義的環境へのかかわり方を批判し、「近代知性の超克」として、日本における環境と人間の不可分の関係を読みとこうとしているのが、ベルグ風土学だとしている。

日本の庭を専門とする私は、オギュスタン・ベルグの「風土の日本」などを参考にしながら、「日本の庭」を日本の環境論へと展開することを試みたいと思う。

日本には、都市の中で自然の再構築として熟成した「庭」と呼ばれる文化の形がある。庭は、仏教の伝来とともに始まるとされるが、その成立の背景には「庭」と呼ばれる空間へと至る前の、自然と人間の関係の場・空間があり、さらには自然の恵みを得るための暮らしの文化があることに気づかされる。「都市」という人間がつくってきた環境の中で、自然とともにある暮らしを考えると、先人たちの日本の暮らし全体を「自然との共生」の文化としての読み解きが可能であると思う。

「庭」の原初を紐解こうとすると「ニハ」、「には」という言葉に出会う。何かをするための、一定の制限された場所をいう。多くの庭の研究者が庭の歴史の始まりの所でこの言葉を引用するが、これ以上の掘り下げられた論考は少ない。ここではその言葉の意味することを精査するのではなく、人の手の加わった2次的自然としての造形空間である「庭」に至る、人と自然の関係を指し示す語として「ニハ」、「にわ」、「庭」という筆者の定める言葉の規定により解説してゆくこととする。

人と自然との関係の場の1つ目は、宇宙のすべてを司る、畏怖すべき自然との直接的関係の場を「ニハ」という言葉で表す。

2つ目は里地・里山と呼ばれる、生活資材を得るために周りの自然環境に手を加えながら、農を基本に置く暮らしの場を「には」と呼ぶ。

3つ目は仏教文化の一つとして中国から伝わり、都市の生活環境の中に組み立てられた2次的自然としての、いわゆる「庭」と呼ばれる場である。

この3つの視点による日本人の自然との関係の場の読み解きにより、次の時代の人間と自然の関係の文化の在り方の手がかりとしたい。

## 1. ニハ

### 自然を司る神との対話のかたち

日本の古代においては地震、津波、洪水、火山の噴火など、自然は人間にとって脅威すべきものであった。人間に危害を加える自然を司る神に対し、人間は敬い鎮めようとしてきた。山には山の神、川には川の神、海には海の神がいる。風の神もある。古来日本では自然を司る八百万の神々が自然界のあらゆる場所にいとされてきた。その神との対話、交信の場所として、自然界においてそのエネルギーが集まって凝縮したような姿が如実に感じ取れる山、巨木、巨石などに聖性を認め祈り奉って来た。こうした自然との原初の関係の姿は、日本独特の原始アニミズム的とも言表される、自然との関係の行為であり場であった。そうした場のいくつかを見てみる。

まずその筆頭に挙げられるものに、巨石や巨石群を自然のエネルギーの凝縮した場として認識し祈る「磐座」と呼ばれるものがある。神は自然界の中において、ある限られたときに自然エネルギーの凝縮の場を神籬、依り代として降りてくる。その場を介して、自然を司るものとの交信が行われたのである。後に庭園の骨格が石組で表現されるようになっていくが、このような自然との交信の装置としての意味が含まれる。自然界のある特定の場が、しめ縄などで印をつけて示され、聖なる場所として認識される。海の正倉院と呼ばれる宗像神社のある玄界灘の沖に、周囲4kmほどの沖ノ島がある。宗像大社沖津宮の社の奥には巨岩が点在し、古代祭祀の跡が残る。祭祀は、初期は磐の上で、その後磐の下へ、さらには磐前の平地へと移っていったと考えられている。今でも一般人の上陸は禁じられていて、まさに古代が封印されたままの場所である。また奈良の三輪山も山そのものをご神体として、山の奥深くの岩のがれ場のような場所を磐座として祀っており、入山が制限され、その神々しい気配を今も残す。

日本では自然界のある特定の場所が、手を加えられることなく聖なる場所として示されることが一般的であるが、人的加工を加えた聖性の示し方が行われている特殊な例に、姫路の生石神社がある。ご神体は岩盤地形から掘りだされた巨大な

高さ5、5mの立方体であり、水に浮かぶように足元がえぐられ、背面には大きな突起があり、全体が巨大で精緻な1つの彫刻のような造形表現となっている。

日本の自然を司る神との対話のまず最初は、これまで見てきたように、自然の中にある際立った聖性を感じられるある特定の場所に出かけて行き祈ることによって行われた。その次の段階では、自然界と人間の居住する世界の境の所に、神との対話、交信の場が設えられるようになる。後には農耕のための神とも結びつき、どの集落にも地域の神が、集落の奥まった森との境に祀られるようになる。

「齋庭」と呼ばれる祭事の行われる場がある。聖性が政治と結び付けられ「まつりごと」として統一する場が、白砂を敷き詰めただけの何もない空間として設えられた。京都御所の紫宸殿の前には齋庭と呼ばれる場所がある。最初は何もない場所に白砂を敷いて、四方をしめ縄で囲われた空間であったが、その後、白砂を敷き詰めた場所に建築も加わり宗教と政治を政として統一する場になっていったと思われる。

伊勢の神宮は、5500haの神宮の森を背景に、森から流れ出る五十鈴川の脇にある、天照大御神を祭る内宮をはじめとして多くの宮社と儀式のための広大な場である。全域が聖性と政治を結び付けた齋庭ともいえる空間である。それぞれの社殿のすぐ脇には次の社殿の立つ場所がある。20年に1度遷宮されるが、次に社殿の立つ中心を示す所に、心の御柱が小さな覆屋と呼ばれる建物に守られ、広い玉石敷きの平滑な空間にぽつんと立つ。この聖域全体へ至るための禊のための場が御手洗場である。直接川に降り身を清める。原初との直接的やり取りが作法として形作られていく。

自然を司る宇宙の聖性に、特定の限られた時間だけではなく、自らが直接、永遠につながろうとする場が墓である。自然を司る神との交信の場としての意味性と、祖先の霊を祭る場としての意味性と、権力のアピールが重ねられ、人工的に組み立てられた場である。土と石を使って高く盛られた古代の権力者の墓は古墳と呼ばれる。堺市にある日本最大の古墳が仁徳天皇陵古墳で、墳丘の大きさは全長486mある。残されている古図から窺い知ることのできる姿は、まるで庭園のような景色が作られていたようである。

秋田県大湯には環状列石と呼ばれる、おそらくは古代の墓であったであろうとされる場がある。直径50mの円の中にいくつもの大小さまざまな円が散在する。その配石はまるで宇宙図のようであり、庭園の石組のようでもある。

巨大な岩を組み合わせ作られたものに石舞台古墳がある。加工されることなく自然石だけの組み合わせであることが、

エジプトのピラミッドや、西欧世界の神々を祭る寝殿や、中国の古代の墳墓などの加工した石材によるものとは大きく異なる。

人は始めに自然の中の聖性を持つ場を選択し、聖性の背後にある自然を司る神と対話するための場であることを示す、印をつけるだけにとどめて来た。次に自然界と人の居住する地域の境に、自然と対話する装置や、場を人の力で組み立てて来た。しかし西欧世界と大きく違うのは、その場の形状に加工の手をできるだけ加えることなく、場を示すための最小限の造形だけにとどめられていることである。場が主であって、人間はそこへのかかわり方を示すだけであるという、環境へのかかわり方であったといえる。

今日経験している、おそらく人間の活動により引き起こされているであろうと思われる近年の自然のこの局端に不安定な凶暴さの中にいる我々は、太古の時代に畏怖すべきものとしてあった自然と再び出会いつつあるように思われる。歴史的遺構としてある、こうした荒々しい原初の自然との向き合い方のための場の持つ意味を理解し直し、見つめ直すことが重要である。

自然をリアリティーを持って感知できなくなってしまっている我々現代人が、今の時代に再び出会いつつある荒々しい自然との向き合い方の場がどのような形としてあるのだろうかとも思う。

## 2. には

### 里地・里山における暮らしと文化のかたち

平安時代後期には、人間が治水と灌漑の技術を発達させ、自然を管理できるようになったことで、荒々しい畏怖された神は、稲作に欠かせない土地を守る鎮守の神となる。豊作祈願など恵みを得るために自然の神々を崇めながら、人間が手を加えて作られてきた自然環境が「里地・里山」と呼ばれる日本の農村である。

農家には「にわ」と呼ばれる、母屋の前に土だけの何も無い空間がある。刈り入れの後の脱穀などの農作業が行われ、また屋内でできない日常作業を補完的に担う場であった。そこは、祭りの時には、神や先祖の霊が降りてくる場であることを示す柱などが印として立てられ、神聖なる空間ともなる。「にわ」と呼ばれる言葉で示される空間は、暮らしの文化の中で様々な用途を受け入れる1つの小さな限られた空間を指し示す言葉である。ここではそうした限られた空間をこえて、農を糧として生活するために、そこに織り込まれてきた里地・里山と呼ばれる、周りの自然に手を加え続けた

結果生まれた、人と自然との共生の暮らしと文化の全体を「にわ」と呼ぶこととする。

日本の稲作農業にとっては、西欧世界の小麦農業よりもはるかに多くの豊かな水が必要であった。水田耕作を中心とした農業のためには平坦地の確保が必須条件であった。しかし大河川の氾濫原の沖積平野は、台風や梅雨時には多量の雨で洪水の危険が多量にある。そのため氾濫の危険のより少ない山裾の少し開けた土地を持つ谷あいや盆地がまず生活の場として選択され、人々はそこに住み込んできた。山を背にし、水田を前にした集落の形態が一般的な農村集落の形態となっていく。狭い谷の一本の水系だけを頼りにその地に住みついた人々は、何代にもわたりその地から恵みを得つづけることができるように、その地の自然を使い尽くすことなく利用し続けるための知恵を育んでゆく。狭い急峻な地形の多い国土での作物の生産はその場の特性に合わせた、大きくは自然に従いながらの改変であった。そのために、細やかな地形と気象条件の読みとりがいやおうなく強いられた。その暮らしの営みの景が流域ごとに微妙に異なり、多様性に富んだ日本の農村景観を生み出してきたのである。食料を確保するための耕作地の自然環境は場所によって微妙に異なり、季節によって異なる。治水事業をはじめとして用水、溜池、作道の整備もそれぞれの場におけるそれぞれの自然環境を、できるだけ加工することなく、その地の条件を読み込むことで行われてきた。棚田の景はその代表的なものである。大きくはその地の地形の起伏に沿いながら、平坦地を確保するための地形改変が高低差に合わせ連続して行く。自然の動きを読み込み、従いながら治水を行う特異な工法に霞堤かすみでいと呼ばれるものがある。一定の量を超えた水は堤防を越流させ、遊水池に導く治水技術である。田畑の畦の脇の取水のための水門も、自然に僅かに手を加えるだけでその役割を担う。大きくは自然の変化を予測し、従いながら、自然を改変し利用してきた結果の姿である。

このようにして作り出された里地・里山の景観は、暮らしと一体化して生み出されたものである。種籾をまき、田植えをし、草取りをし、刈り取るという一連の作業によって支えられる稲作は、一つ一つの節目を、自然が持つリズムと一体化しながら乗り越えることが重要であった。その知恵が、祭りや季節折々の風俗習慣などとなってきた。自然を読み込んだ暮らしの場と、自然を読み込んだ日々の暮らしがあいまって初めて、自然と人間の厳しい共生の姿がそこにあるといえる。

「大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り

立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国そ 大和の国は」と万葉集に歌われた「豊葦原の瑞穂の国」と称えられるようになった日本の里地・里山と呼ばれる農村の景観である。

ここでもう一つ重要な視点が、都市生活者にとって里地・里山がどのようなものであったのかである。ハルオ・シラネが「四季の創造・日本文化と自然観の系譜」で以下のように述べている。平安時代の中・後期以降、人間と自然が親しい関係にある場所としての里山、田舎の庶民生活が、民話などの民衆文学で主役となる。また、貴族たちにとって里山は社会の脅威や喧騒から逃れることのできる場所と考えられていた。それに加え、中国から伝わった禅の影響を受けた水墨画に、山に住む隠者が描かれ、山里が理想化された。

また、日本人の自然を嗜好する文化の基調を形作ってきたものに和歌があるとハルオ・シラネは指摘する。そこに娯楽としての「山遊び」、「野遊び」が歌われている。春の桜、秋の月、冬の雪をなどの和歌の題にもとづいた季節に関連する娯楽の多くは、江戸時代には、武家たちや庶民にも受け継がれていった。

今日の里山が、農業生産の場としての意味合いが減少し、その在り方がどのような姿を取るべきであろうかと考えるとき、この都市生活者にとっての里地・里山への視線は大きな示唆を与えるものである。

明治の開国とともに日本へ入ってきた欧米人の一人イザベラ・バードが「日本奥地紀行」で「東洋のアルカディア」と称した美しき日本の農村景観がかつてはそこにあった。それはイザベラ・バードにとっては、生活者としての視線ではなく、自然と人間の関係の結果の美しき姿が「には」として目に映ったことであろう。

生態系では緑色植物が生産者であり、その他の生き物は消費者である。日本はその生産者としての緑地が今日でも国土の66%を占める。緑地の割合が多い国の1位はフィンランド、次にスウェーデン、日本は第3位の豊かな森林を持つ国である。自然との共生が模索される中で、その森に住み込んできた里地・里山の暮らしが、自然との共生の思想として注目を浴びる。しかし自国の食糧を4割程度しか生産しない国になってしまった今日、農業従事者は減少する一方であり、里地・里山は過疎地となり、棚田は放置され、多くの田畑は草に覆われてしまっている。生活のための資材を取るためにかかわり続けた結果として、足元まで明るい光が差し込み、山野草やキノコの生える雑木林は人の手が入らなくなったために、森林飽和と呼ばれるような、人の立ち入れない鬱

蒼とした森になっている。植林地も間伐がされないまま荒れ、大雨ごとに大規模な地滑りを起こしている。また食材のために持ち込まれた竹が急速な勢いで自然の植生を侵害し広がり続け、森林の景観が大きく変わりつつある。里地・里山が農業生産の場であることが大きく減少し、暮らしの場としてかわり続けた結果として出来た景観が維持されるのが大変難しくなってきた。

里地・里山の新しい暮らし方がどのような形をとるのであるか。藻谷啓介による「里山資本主義」で示されるような里地・里山における、都市生活者であった人たちの暮らしの場が生まれつつあることも新しい里地・里山の姿である。

自然との共生が模索される今日、生産の場としての意味を含めつつも、都市生活者であった貴族たちや文人たちにとっての里地・里山の意味も含めた、次の時代の人間の豊かさを実現するための場としての思いを込めた「には」との呼称である。しかしそれは形ではなく、新しい形の暮らしと自然の関係の姿として生まれてくるものである。

### 3. 庭

#### 都市における自然のかたち

一般的に庭と呼ばれるものの歴史は、大陸文化としての仏教の伝来とともに、建築に付帯する空間として始まるとされてきた。しかしその背景には「ニハ」「には」で述べてきたように日本独自の自然との対応の仕方から生まれた自然観が背景としてあった。自然との直接的対応の姿であり、神との対話の場としての「ニハ」。そして次に食物生産の場としての、里地・里山における人間と自然の関係の暮らしと文化としての「には」があった。そうした土壌の上に、大陸文化が入ってくるのであるが、「庭」と呼ばれるある限られた空間を論じる前に、都市を自然との関係の在り方の姿としての視点から、どのように形成されていったのかを少し見てみたいと思う。

#### 3-1 自然のシステムと呼応する都市

自然の地形には起伏があり変化に富んでおり、そこには自然のエネルギーの流れがある。エネルギーがよどむことなく集約され、滞留することなく拡散する適所を読み解くことが、繁栄につながるとされる法として「風水説」と呼ばれる思想が中国から伝わってくる。「には」の所でも述べたように、日本は狭い土地でありながら起伏の多い国土の中での農耕であったため、耕作地の選択とその地における気象と地形の微妙な変化の読み取りが、常に課せられていたこともあ

り、都市計画から住居、墓地にまで及ぶこの吉凶判断の体系を、無理なく受け入れていく。地形の起伏から自然のエネルギーの流れを読み、神話的物語と結びつけながらの形象化が都市という人工環境となる。

都市の建設にあたっては、まずはつくるための場の選択があり、全体の構成がある。風水説では天上界を司る四つの神がいるとされる。その四つの神の意に従う場の選択が行われる。平安京は、まさに四神相応の土地であり、北方の舟岡山を玄武と見立て、東には青龍の鴨川の流れがあり、西には白虎として山陰道が走っていた。南には朱雀として戦前までは巨椋池（諏訪湖とほぼ同じ大きさの湖）が存在した。風水を著す表現の一つに背山臨水という言葉がある。山を背にして水に臨む。平安京はまさにこうした山を背にした自然のエネルギーが集まる場所であり、集まったエネルギーを滞留させないための川が流れている土地であった。そのことにより、都市そのものが生命として息づいていた。多くの場所に湧き水があり、1200年の歴史の時を超えて今も多くの社寺仏閣に名園が存在し続けるのも、都市全体が生き物として呼吸していたからである。狩野永徳によって描かれた「洛中洛外図屏風」からは、安土桃山時代の緑豊かな京の町の暮らしと文化が見て取れる。都市という人工物が、周りの自然とつながり、人工的環境である都市も生命のシステムと連動した構造になっていた中で暮らしと文化であった。

江戸の町は、享保期には武家人口約50万人、僧侶と神官が約3万人、町民約50万人、100万人を越す人口を有する世界最大級の都市であった。その土地は、武家地6割、社寺地2割、町人地や畑など2割という構成であった。大名は上・中・下・抱屋敷を中心部から郊外へと段階的に設けていた。屋敷には縮景式の庭を持ち、山や谷、川の流れる緑あふれる場であった。広大な敷地を持つ大名屋敷の一つである尾張徳川家の下屋敷戸山荘は約13万6000坪の敷地に庭が展開していた。また将軍家の浜御殿（現在の浜離宮）には鴨場が設けられ、鴨が飛来する場が庭の一角に設けられていた。整然と整備された都市の大名屋敷街の塀からは豊かな緑があふれていた。

江戸の町が欧米諸国に開国された当時、ヨーロッパの諸都市は既に産業革命を体験しており、産業の発展を優先した都市計画は、労働者の生活環境の整備をなおざりにして、どこもゴミと汚物と汚水にあふれていた。そうした欧米人が目にした江戸の町は、緑あふれるガーデン・シティであった。また都市と農村がエコロジー循環の中にあることのすばらしさが指摘されている。ウィリアム・モースは「日本ではすべて

の廃棄物が都市から運び出され、農地に肥料として利用されている」と、述べている。糞尿が、近郊の農家に高価に売り渡されていた。人糞以外にも、馬の糞、魚河岸から出る魚の屑、台所から出る厨芥類、手工業の産業廃棄物である油粕、酒粕、醤油かすなどである。これらが畑地にすきこまれる重要な有機肥料となる。そして毎朝新鮮な野菜が持ちこまれるのである。歙形恵齋が描いた「江戸一目図屏風」からは都市の全体の姿、景観がまさに庭のようであったであろうことが見て取れる。

小さな地方都市であるが、地形との関係が、非常に自然に立脚したものとなっている例の1つとして福井の一乗谷の朝倉遺跡を取り上げたい。南北約1.7キロの谷筋の、南と北のそれぞれ谷が狭まったところに、上城戸跡<sup>かみきど</sup>、下城戸跡<sup>しもきど</sup>と呼ばれる土塁と石垣、堀による外部からの侵入を防ぐ防御施設が作られ、1つの谷が自然の城塞都市のようにになっている。戦乱の世に防壁に適した自然地形の選択が行われ、そこにさらなる地形の読み込みが行われ、最小限の防御のため施設が作られた結果の都市の形である。庭園史的にはいくつかの館跡の庭園遺構が傑出したデザインとして扱われ、その他の都市遺構も次々と発掘が進むが、この谷に築かれた都市全体が1つの庭、庭園都市という言い方ができる。

### 3-2 都市文化全般における自然の洗練された表現と庶民の暮らしの文化

直接的な自然の断片の組み合わせとしての庭の前に、日本人の都市生活者における自然表現の文化全般をまず見渡してみたい。またここでハルオ・シラネの「四季の創造—日本文化と自然の系譜」の中での日本人の自然観の形成への視点を参考とする。その中で述べられているのは、日本人の自然観は中国からの文化の影響を大きく受けながらも日本独自の文化に変換されていく過程で和歌がその中心軸的役割を担ってきたとの指摘である。和歌で詠まれた自然が、屏風絵、襖絵、絵巻、名所絵などの視覚芸術にも広く影響を与える。和歌は男女間のコミュニケーションの主要な手段となり、自然をごく短い言葉で多くを語ることが求められ、自然のイメージは洗練されていく。貴族たちの間では、感情や思考を花、植物、動物の描写をとおして間接的に、優雅で上品に表現することが好まれる。また、漢詩を通して日本にもたらされた、何かを象徴するのに、自然の形象を用いることが多く行われるようになるが、その表現が和歌のなかにも表れてくる。例えば、川や滝を遡る鯉が成功や吉兆、あるいは護符の意味を持つ。そうしたことが庭の表現にも影響を与える。天龍寺には庭の

中に中国の故事「登竜門」に倣った龍門漢が夢想国師により作られている。鯉が滝を上り竜になるように修行僧の努力を滝の形で教えている。龍門漢は庭の主要テーマの一つになっていく。その他護符的意味を持つ自然のイメージで頻繁に用いられるものに松、竹、鶴、亀、七草などがあり、これらも庭の景色としての表現ともなる。また、風光明媚な象徴的な自然風景表現として松島、白河の関、富士山、吉野、龍田川などの名所旧跡が、さらには漢詩に描かれた世界が、和歌の歌枕として扱われる。また日本の伝統芸術の基となる、着物の柄から、陶磁器、漆器、茶道具、生け花などのデザイン、食べ物までが和歌の影響を大きく受けて発展する。和歌に詠まれた世界は庭にも大きな影響を与える。風光明媚な場所の庭の中での再現事例の一つに、桂離宮の松琴亭の前の天橋立の風景がある。また白居易の「白氏文集」などにより早くから日本人に親しまれた中国の名所に西湖があるが、水戸家の小石川後樂園には西湖堤や円月橋が作られている。

こうした貴族の自然への嗜好は、江戸時代には庶民独自の自然嗜好も加わり、さらに多様化する。こうした自然嗜好の暮らしの文化は、貝原益軒により1688年（貞享5年）『日本歳時記』（京都日新堂刊）として著された。植物、天文、地理など多彩な分野の最新情報や、年中行事、食べ物、衣服など様々な日常生活が、季節とどのようにつながっているかが示され、季節の移り変わりとともに人生を豊かに生きるための手引書となった。

このように都を中心とする平安宮廷文化が、きわめて複雑で体系化された季節感を発展させ、その季節感が、その後の日本人にとっての優雅さのモデルとなる。さらに江戸期以降には庶民の暮らしと文化にまで広く欠かせないものとなっていく。庶民たちの自然嗜好を背景として、庶民たちが都市の中で直接自然に触れることのできる娯楽の場が様々に生まれてくる。8代將軍吉宗の花見政策により桜の花見が大衆化し、上野に加え、飛鳥山、御殿山、隅田川が桜の花見の名所となった。臥竜梅で有名な江東亀戸静香庵の「梅屋敷」、芝の植木屋久蔵の「牡丹園」、大久保村の「つつじ園」、そのほか「菖蒲園」などが花を楽しむ名所となる。また大名や商人たちのような庭を持ってない庶民たちを対象とした、木戸銭を払って野の花を楽しむことのできる庭「向島百花園」が喜ばれた。園芸ブームにより、染井や入谷には品種改良が盛んに行われた朝顔の市が立ち賑わった。歌川広重の「道灌山虫聞の図」には月を愛で、杯を傾けながら虫の音を聴く人々が描かれている。都市の中で庶民たちも自然を楽しむ豊かな時間を随所で得ることのできた暮らしを見ることができると。

こうした都市の中での生活文化全般における自然嗜好の1つとして、生の自然を使った室内の生け花があり、盆景があり、屋外における具体的自然の造景としての庭がある。

### 3-3 日本の庭に描かれたもの

庭の造形は、自然の中から抽出された要素としての石と木と木の組み合わせによる空間構成の表現となるが、デザインの形態は大きく整形式と自然風景式に分かれる。自然観の違いにより自然の扱い方の違いが生まれ、整形式と自然風景式とに大きく分かれる。自然<人間ととらえる西欧においては、整形式庭園が長く歴史的発展を遂げてきた。しかしよい自然が少なくなってきて、牧歌的風景すらなくなってきた産業革命の少し前、イギリスで自然風景式が生まれる。これがアメリカにわたり、個人の庭空間のデザイン手法が、公共空間デザイン手法となったのがランドスケープデザインである。中国・朝鮮半島・日本では、自然>人間の自然観のもと自然風景式庭園という様式を成立させた。その自然風景式と呼ばれる造景手法であるが、それぞれの国においてはその表現は異なる。

中国の庭は、水墨画で描かれた山水のように、日本ではお目にかかれないような起伏の激しい自然景勝地の景を範としているため、奇岩怪石で組み立てられた表現となる。

韓国の庭は中国や日本の庭と比べ自然をあまり加工しない。例えば晶徳宮の庭「秘苑」は背山臨水の地に宮殿を構え、裏山が庭であり、その中に自然を鑑賞するための小さな亭を建て、亭の前の本来の自然との境を僅かだけ造形する。自然の中で疑似自然を造形すると陳腐なものになってしまうので、抽象的な整形の四角い池と、丸い中の島が作られる。このように自然風景式とひとくくりに大別するが、それぞれ異なる。

日本の庭は、生命のシステムにのっとった都市に、文化として、中国、朝鮮半島からは楽園思想として、道教の神仙説、仏教の須弥山説などが伝わり、さらにそれを現実の生活空間のそばに具現化する建築及び庭園の技術が伝来する。楽園思想の一つ浄土思想では西方に阿弥陀仏のいる極楽浄土があるという信仰である。楽園を実現させるためにはまず建設の適地の選択が重要になる。風水にのっとった都市構造の中に、さらに風水にのっとった建築配置からなる仏教建築としての寺院建築や、住空間が作られる。建築とその周りの空間全体が自然のシステムと呼応する楽園思想の場となる。その一部が今日「庭」と呼ばれるものであり、そこにさらなる具象としての楽園が描かれる。

日本においては、自然が都市の中の居住空間の中へ持ち込まれる過程で、日本人独特の原始アニミズム的思考を背景に、都市的に洗練されながら日常生活の中に表現されていく。日本の庭は、飛鳥時代、奈良時代は中国、韓国の庭園文化の影響を色濃く受けながら始まり、平安時代に日本最古の庭園書「作庭記」が著され、その後の我々が日本庭園と呼ぶ形の原型が作られたといえる。

楽園思想が描かれるためには、これまでも見てきたように、都市全体が周りの広域な自然のリズムと連動しているばかりでなく、その一角に建造される建築とその周りの空間全体も自然のシステムと呼応することが、その効果をより強調できる。多くは周りの自然の地形の起伏からくるエネルギーの流れとの関係であるが、さらにもっとマクロな自然と呼応として、多くの古代文明にもみられる、天体の軌道のある特殊な時間との関係を持つ敷地配置の設定がある。それが明快に表れ、説明できるものをいくつか挙げる。春分、秋分に太陽が真東から出て真西に沈むことを空間全体の配置で受け止めるデザインがなされている1つに、浄瑠璃寺の観音堂と庭園がある。お彼岸の春分・秋分に当たる日には、太陽が真東の「三重塔」から昇り、西の御本堂「九体阿弥陀堂」の真裏に沈む。建築と庭の空間全体が、太陽の軌道と一体化し、極楽浄土を最も体感できる日であると考えられており、まさに宇宙的自然とのつながりのデザインである。

もう一つが、宇治の平等院の鳳凰堂と庭園である。仏の教えが正しく伝わらなくなるという末法思想が広まった平安時代、その恐怖に立ち向かうために作られた極楽浄土の世界の具現が宇治の平等院である。太陽が真東から昇り真西に沈む春分と秋分の日、真東を向く鳳凰堂に背面から直線状に夕日が差し込むと、あたかもその先に西方極楽浄土があるかのように光り輝くように演出されている。

春分、秋分の日には太陽が真東から登り真西に沈むある特別な宇宙時間であり、太陽の軌道との関係から選択される敷地の、建築配置を含めた全体の空間構成は、自然のシステムを受け取る、宇宙とつながる構造として意識されている。イギリスのストーンヘンジャマヤの遺跡チチェン・イツァなど多くの古代文明には、この、春分、秋分や、夏至、冬至の日の太陽との軌道との関係から、宇宙的自然エネルギーを受け取るための空間構成や空間造形が見られる。

楽園思想の実現に適した敷地の選択が行われ、そこに楽園思想の意思の造景が加わることにより、壮大なスケールでの空間演出が成立する。たとえば安芸の宮島の厳島神社がある。古くから島そのものが神として信仰されていた地であ

り、ご神体の<sup>みせん</sup>弥山を借景とし、前面には青々とした海が広がる。弥山という名称は明らかに須弥山を想定したものである。宮島全体が神と捉えられていたため、木を伐ったり、土を削ることでご神体を傷つけないようにと、潮の満ち引きのある場所に造られたといわれている。「神を<sup>いづ</sup>斎<sup>まつ</sup>祀る島」という語源のように、平清盛の時代は、海上の大鳥居をくぐり、厳島神社を参拝することが作法とされていた。

日本は小さな島国でありながら、南北に細長く、起伏の多い複雑に入り組んだ地形を持ち、その中を急峻な河川が幾本も流れ、流域ごとに独特の、多様な自然景観を持っている。そこにある手つかずの自然環境が、エネルギーの集約と拡散などのドラマ性を持っている場所が随所に存在する。選択する地形そのものが聖性の演出に適した場所であることは、楽園思想の具現化の重要な行為となる。

多治見の永保寺は土岐川の川筋が狭まり、岩盤の間を美しく蛇行する脇に、夢想国師により開山された禅宗の修業の場である。本殿の観音堂脇にも上部から自然の水が流れ落ちる巨大な岩盤があり、それが庭の主景になっている。厳しい姿を持つ地形の自然の場の中に身を置くことが修行であり、そこにあえて人の意図を持った楽園のための造景を行うことなく、そこを修行のための身を置く場として設定された空間である。禅の世界では外部の楽園を思い描くことが禁じられ、自己の内部に解脱としての楽園を構築することが求められる。禅の庭である枯山水では最小限の石と白砂による抽象的宇宙表現となり、瞑想することによって解脱するための手がかりを与える役割を持つものとなる。

都市の中で、自然の再構築が都市文化としての庭として発展し展開していく過程で、日本的な原始アニミズム、道教的な神仙説、仏教的な須弥山説、さらには浄土思想が、巧みに混交し折衷し、共存し、庭の全体表現のなかの1つの物語的要素となっていく。磯崎新が「世界模型としての庭」の中で指摘しているのが、楽園思想の再現が、直接的な天体の軌道や、マクロな環境との関わりを持つとする視点から、禅がもたらした自己内部への視点により、ある限られた区画の中での楽園の構築に向かうという転換がおこる。

さらに楽園は、その後の日本で洗練された自然嗜好として、万葉集や和歌や漢詩などの歌に詠まれた自然風景の再現や、風光明媚な場所の自然風景の再現、日本国内ばかりではなく中国をも含む「名所」を要約した再現が「見立て」という手法で表現されたエンターテイメントなものになっていく。

また繊細に洗練された宇宙的時間と呼応がエンターテイ

メントなものになり、日本人が好んできたのは月との位置関係である。中秋の名月にその姿をうまくキャッチできる敷地の選択である。慈照寺銀閣は京都の東山に月をめぐるために選ばれた場所である。開山は室町時代足利義政によるが、後世の改修で月の光との関係の銀銀沙灘、向月台と呼ばれる庭の造景がなされている。桂離宮は月の桂と呼ばれ、中秋の名月を鑑賞するための敵地が選ばれ、月見のための茶屋が庭の中に点在し、庭に月を映すための池の配置や、蹲の配置までに及ぶ。

庭で描かれた自然は、貴族たちによって要約され洗練され、歌に詠まれた、自分たちが見たいように組み立てられた自然であった。

また、洗練された自然の表現の中で、時間とともに変化することを自然の特質として、人の世のはかなさと重ねあわせて歌や絵画に表現されることが多くある。生き物を直接表現構成要素とする庭ではこの時間とともに変化することを、実際のデザインとして強調して見せる手法も日本の庭の大きな特徴の一つである。1年の時間変化である春・夏・秋・冬をサクラ、モミジなどの植物で強調する。また悠久の時間は苔や苔むした岩で強調され、生態的変化の時間のデザインといえることができる。1日の時間のデザインとして、「汐入の庭」と呼ばれるものがある。江戸期の海の近くに作られた庭園では海水を引き入れ、汐の干満で池の形状が変化する。光と影の1日の変化を池の水の建築への映り込みの妙としてデザインとしたものもある。

### 3-4 庭園の様式

我々が一般的に庭園と呼んでいる空間の呼び名は、その発生の時から長い歴史の中で、にわ、その、しま、前栽、坪と呼ばれ、明治以降に庭園と呼ばれるようになったものである。

楽園思想や、自然嗜好を表現する場、表現する器としての庭園の形態を様式として分類すると、池庭、枯山水、露地、坪庭、と分けることができる。多くの日本庭園は自然の山、谷、川、海（日本庭園では池は海として扱われる）の具象的形の縮景として描かれる「池庭」と呼ぶことができる。建築の様式が寝殿造建築、書院造建築、数寄屋風書院建築と変化を遂げるのに呼応し、池庭の形体もより複雑化する。桂離宮は池泉回遊式と呼ばれる池庭である。主建築があり、池の周りに配された茶屋の周りには、それぞれ小さな庭がしつらえられ、全体が周遊する苑路によって結ばれ、個と全体が明確に整理されたデザインとなる。建築のある一部に対応した庭から、主役が庭となり庭の中の庭を見るための、庭の中での

催しを行うための建築配置となる。西欧の王侯貴族の庭園から比べれば狭い約6haの敷地の中を巡る苑路からの景観に洗練された様々な、デザインとしての空間演出が行われる。ある場所では閉じ、次に開けと変化を繰り返すデザイン手法により奥行きしんがいの深さとしての演出が巧みである。鎌倉・室町時代には「枯山水」と呼ばれる手法が生まれる。自然の全体を石と白砂だけの最低限のもので表現する抽象表現である。臨済禅では山水を描くことは、宇宙の神韻をとらえ悟りの境地を得るとされ、禅の庭は山水画の世界をこの世に出現させるものとされた。石立僧と呼ばれる禅僧により作庭された庭が多く生まれる。桃山時代には「露地」と呼ばれる庭の様式が生まれる。「市中の山居」と呼ばれ 都市のただなかしんがいにありながら山の中に居するような演出が、露地門から茶室までの儀礼空間として構成される。小空間の意匠の確立である。市中の山居は山の中で隠棲するよりも価値あると認識されていた。建築に光と風を入れる「坪庭」と呼ばれる空間が江戸期の町屋建築に生まれる。露地の庭園構成要素である蹲踞、灯籠、飛び石によってデザインされる。今日的庭の意味を考えると、修学院離宮が、「農の景」として描かれたことも様式の一つとして挙げておきたい。

それぞれの様式の中に、楽園思想、洗練された歌に詠まれた自然嗜好の物語、吉凶の物語が重ねあわされて表現されていくのである。

### 3-5 近現代の庭

日本の自然風景式庭園で描かれてきたものは、自然そのものではなく、望む自然の形が楽園思想や、歌に詠まれた世界と重ねあわされ、縮景された自然の形であった。しかし明治以降新たなデザインとして、溪流、アカマツ林など原寸大の自然風景が、山形有朋の無鄰菴で庭のデザインとなり、その後野村碧雲荘などの庭園が植治こと7代目小川治兵衛によって生み出されていく。関東では武蔵野の雑木林が飯田十基によって庭の景色として持ち込まれる。京王プラザホテルの外部空間が深谷光軌により雑木林とモダンなテラスの組み合わせとしてデザインされたが、これは庭園の手法による都市空間への展開ととらえることができると思う。また2014年に竣工した「大手町の森」では、東京の高密度な都市空間に野性味あふれる自然度の高い雑木林の再現が、パブリックスペースのデザインとして生まれている。

都市の中の人間と自然の新しい関係の形を考えようとする、欧米で新たな大きな動きとなっている都市農業というものに目が行く。都市の中での新たなコミュニティの場とも

なっている。修学院離宮がデザインとしてたどり着いたのが眺めとしての農村空間であるが、日本は狭い国土のため里地・里山が比較的近くにあるため、市街地での農業はそこまで大きな話題になっていないが、市街地にまだまだ多く散在する農地も、また新しい都市における自然と人間の関係の場としての庭ととらえることもできるように思う。また市街地の利用できない斜面地には、荒れた雑木林がまだまだ多く残る。人が手を入れることで、里地・里山の雑木林とはまた違った、都市の庭となりうる可能性を持つ場所であるように思える。

都市のオープンスペースは都市を豊かに魅力的にするための重要なスペースである。この都市のオープンスペースのデザインに、生き物を主役とした庭空間、さらにはランドスケープデザインの造形を行う領域以外の人たちが多く参入するようになってきている。空間の多様な豊かさのためには大変重要なことである。彫刻家イサム・ノグチ、建築家谷口吉生、現代美術作家杉本博などがいる。その中で、庭を専門とする私は生き物を主役として「庭」という造形空間を熟成させてきた歴史につながる、都市の中での人と自然の関係の在り方の表現がどのようなものであるかを考えたいと思う。都市の中で新たな「庭」の姿を。

#### 4. 終わりに

我々が一般的に論じる庭は「庭」の項で述べてきたように、自然を生活空間のそばに再現させる表現空間である。山と谷と川と海を縮景した池庭を主な表現として組み立てられてきた本来の自然ではない2次の自然であった。その表現が他の芸術文化と大きく異なるのは、その表現の場である実体空間が生き物であることである。個々の形態も、組み合わせられた全体空間も、生き物であるため変化し続ける。他の芸術表現と根本的に異なるのは、その表現される場には、ミクロな環境としての自然の地形、起伏、水分条件、土壌がすでにそこにある。その場はマクロな自然環境としての、それぞれの地域のもっと広域の生態的環境に、さらには地球という惑星に、さらには宇宙にまでつながった場である。そこへ、日本人が原始アニミズム的意味を強く感じる自然の断片である木と水と石などの生きた構成物によって、その場における理想とされる自然が組み立てられる。持ち込まれる庭の構成要素としての石や木や水は、庭の1材料、1断片でありながらも、生きているので、マクロな生命システムと同じ生命システムを自らの中に持っている。1本の木であっても1輪の花であっ

ても、1個の石であってもその中に宇宙と同じ生命のシステムが含まれる。庭の来訪者は表現された自然の1断片、その組み合わせの空間を通じて、自然を文化として熟成してきた物語と出会い、さらにはその背景にある自然のシステムと出会う。表現の背景には、もとある自然への対応の仕方としての、日本人の「ニハ」「には」の中で見てきた環境へのかかわり方と同じものがあることが見えてくる。かかわろうとする場がすでに生き物として変化する自然であることに恐れ、敬いを持ったかかわり方であった。作庭記の「乞わんに従いて」がすでに答えとして出されていたことに気づかされる。八百万の神々を自然の中に見る日本人独特の原始アニミズム的自然観、すなわち小さな場や物との関わりにも、宇宙的マクロな自然との連動性を見る自然観が、里地・里山では暮らしの場の景観となり、都市生活の中では洗練された「庭」という文化の一つの形となっていることが見えてくる。同じ自然観を背景としてそれぞれの場における多様な文化の熟成としての3つの形であったことが見えてくる。

この論考では、人間と自然との関係という1つのことの3つの形として、奥山で、里地・里山で、都市で、「ニハ」、「には」、「庭」という3つのことばで整理することを試みてきた。それは、それぞれの場での今日の自然との関係の在り方を考えるための視座の獲得のための整理であった。

しかし「ニハ」「には」にあった直接的自然との対応の姿が、今日では必然ではなくなってしまっていた。こうして整理してきた視点を獲得できても、都市はあまりにも人工的に改変されてしまっていて、それぞれの場での自然の気脈が見えず、マクロな自然とのつながり方が見えてこない。たった一つの小さな場であっても、マクロな自然との連動性が持たれていなければ、その空間は生きた空間としての力を持たない。

地球的規模での自然環境のダメージが、人間そのものの存在を危うくしてきている今日、その自然との関係を問い直すとしても、多くの都市生活者には、自然がリアリティを持ったものとして見えなくなってしまっていて、混乱した、小手先の自然との共生のデザインがあふれているように思えてならない。

今日的関わりの意味を込めて「ニハ」「には」「庭」それぞれの場における自然の気脈としてのミクロな自然、マクロな自然と人がつながることを取り戻したい。しかし人間は自然そのものではない。

自然とは何か。人間とは何か。人間存在は、生命の一員である人間存在であることと、生命からあまりにもかけ離れて

しまった人間存在であることの二面性を持つ存在である。その境界をどのように生きるのかが今突き付けられているのである。

生態系では緑色植物が生産者であり、その他の生き物は消費者である。日本はその生産者としての緑地が今日でも国土の66%を占める。国土全体が生命の場、ガーデン・アイランドであるという素晴らしい資産を持っている。こうした環境の中での、人間存在の二面性の境界の在り方の姿を「ニハ」、「には」、「庭」それぞれの場における今を問うことになげたい。

#### 参考文献

- オギュスタン・ベルグ 『風土の日本』 ちくま学芸文庫  
1992
- 川勝平太 『ベルグ「風土学」とはなにか』 藤原書店 2019
- ハルオ・シラネ 『四季の創造』—日本文化と自然観の系譜—  
角川選書 2020 pp.32~33 pp.159~162 pp.232 ~ 233  
pp.236 ~ 238 pp.246 ~ 249
- 杉本博司 「宗像大社沖津宮」『おさらい日本の名建築』 カー  
サブルータス 2020 pp.76 ~ 81
- 磯崎新 「世界模型としての庭」『庭園と離宮』 講談社 1983  
pp. 33 ~ 44
- 篠原雅武 『人間以後の哲学—一人新世を生きる—』 講談社  
2019
- 岡田憲久 『日本の庭ことはじめ』 TOTO 出版 2008